

昭和23年7月1日第3種郵便物認可 通巻第1460号 昭和53年2月26日(毎日発行) 発行 昭和24年5月10日創刊 定価100円(税別) 1978年2月26日

毎日 **777** DE LUXE

2-26 [デラックス]
週刊1978

特集

西アフリカ風土記

一・三・六事件の主役たち

まもなく兄弟13人

ふるさとの産業 **信楽焼** [滋賀県]

ひと俳優 **片岡孝夫** さん

銃をかついだドゴン族の古老

400yen

世界に生きる⑥

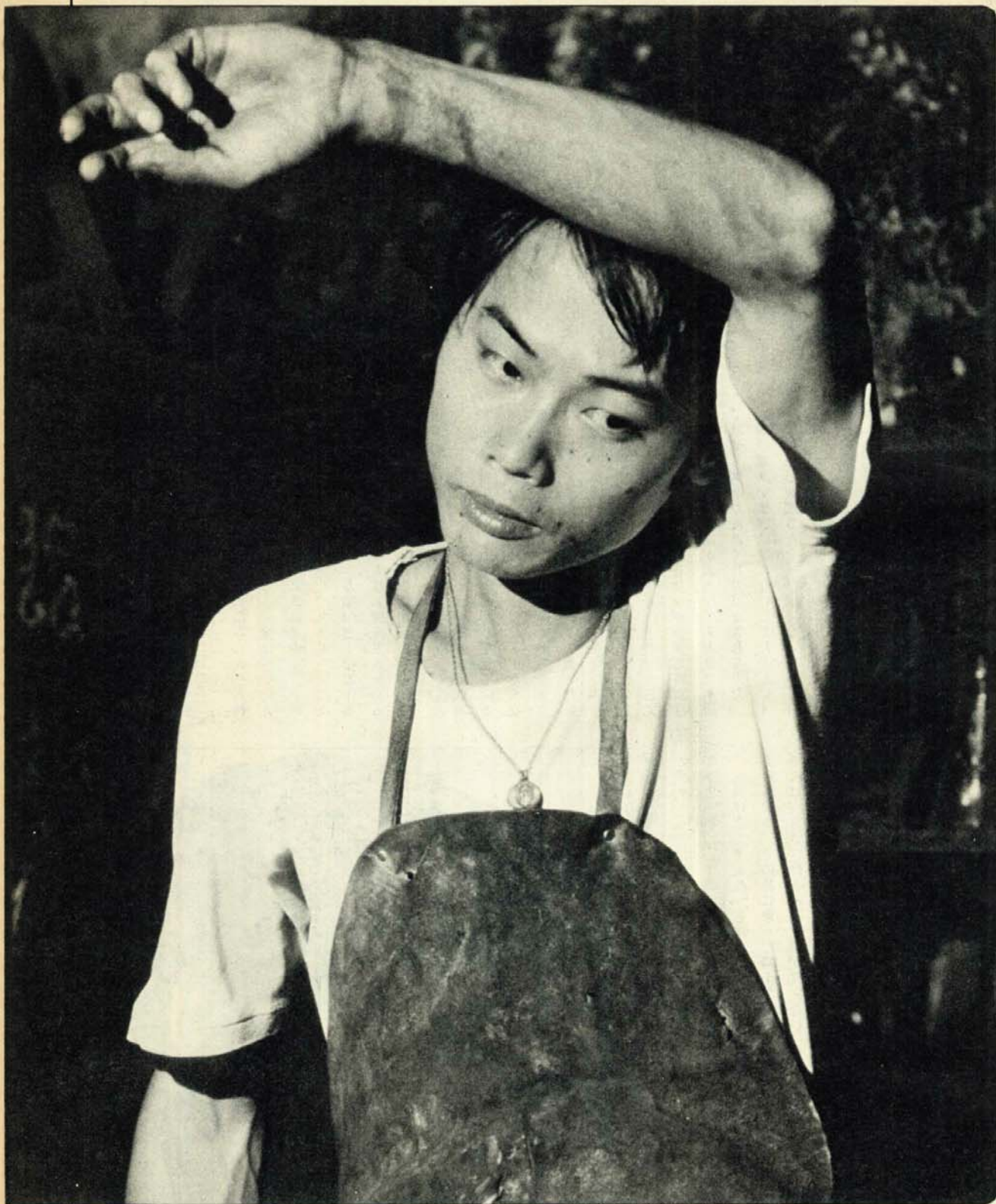
文——左能典代
写真——鈴木智子

京なままりの 鉄たたき ジャ。ホネーズ 廣瀬満明さん(在ミラノ)



鉄は熱いうちに打て 最初のひと打ちで作品の優劣が決まる





鉄工房の中はまたたく間に30度以上の暑さになる 体力との戦いも彼にとっては問題となる

「鉄は腰を入れて熱いうちに打つ」これに限る イタリアの小さな田舎町の鉄工房の一日 真っ赤に焼けた一千度の炉から一本一本鉄の棒を取り出しては打つ また 打つ それは やがて 花や草や鳥の形を成し ヨーロッパ各地の家々の扉 門 窓わく シャンテリア 等々となつてゆく

7代にわたって使われた古い炉で無垢な鉄を焼く

FERROBATTUTA (フェロバツツト)

「そのまま訳すと、鉄たたき。かつて馬車や馬のひづめを作っていた鉄たたき職人たちは、時代の変遷とともに自動車を作るようになった。自動車のパンパーは、そうしたイタリアの馬車作り職人たちが残した一つの遺産だった。」

廣瀬満明さん(京都生まれ、二十八歳)のいるフェロバツツト工房フマガツリも、馬車や馬のひづめ作りから出来上がった会社の一つだ。フマガツリはミラノ市内からおよそ十二キロほど離れたピオルテッロ・ヴェッキオという小さな村にある。ピオルテッロ・ヴェッキオ、すなわち、古いピオルテッロと呼ばれるその地帯は、今やもう、ほんの二区画しか残っていないのだが……。

※※※

古いピオルテッロに着くと、汚れた壁に沿って並べてある木のベンチに数人の老人たちが腰掛けていた。老人たちは私たちが、鉄たたきの日本人を尋ねてきた者と分かったらしい。老人たちはいっせいに、にっこりと笑い、隣の大きなドアの奥の方を指さす。指先が示す方向に歩いて行くと、広い中庭を囲んで古い家がたくさん立っていた。それらは一六〇〇年頃建てられた古いアパートだ。崩れ落ちた白い壁の中から赤いれんがが肌をむき出し

ている。「このアパートには左官屋、年金生活者、働かぬ人など十五世帯が住んでいるんです」工房の中から仕事着姿で現れた廣瀬さんが関西なまりの日本語でそう教えてくれた。アパート群は工房を囲んで立っている。

「だから何もかも筒抜けになるんです。日曜日に歩いただけでも、だれかが見ているんです。そして、どうだ、仕事は進んでいるかって声をかけてくるんです。お二人がここに来られるって、みんな興奮してましてね。うるさかったでしょう」

人口三万七千人のピオルテッロ・ヴェッキ

オはそんな土地柄の村である。

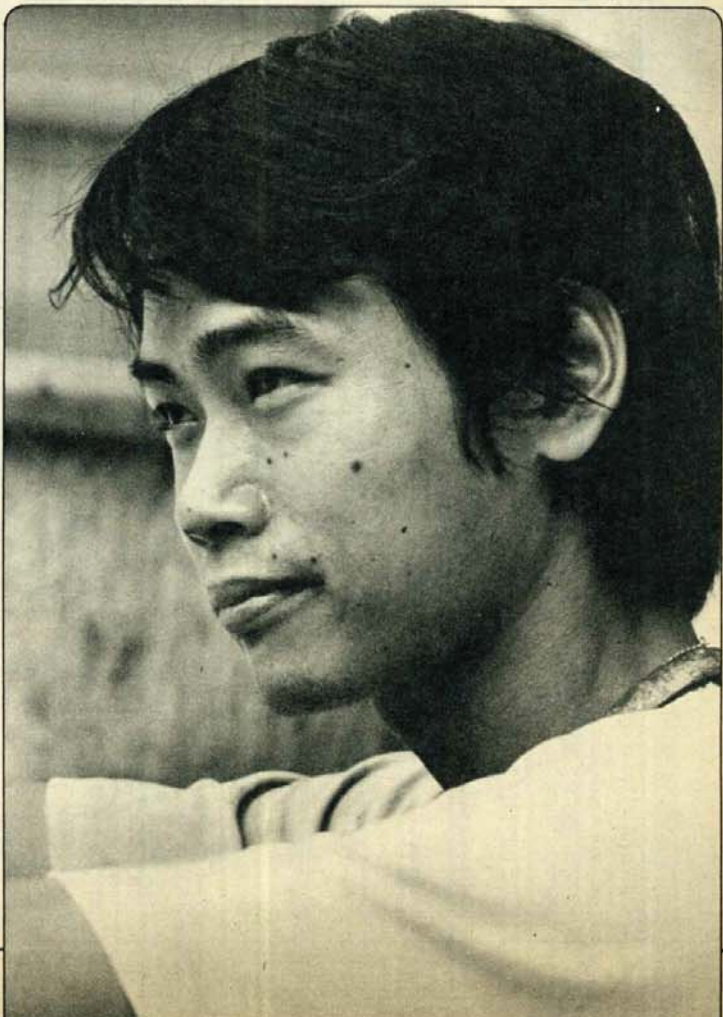
「私たちが彼の仕事場に入っていく。今まで、だれもこの仕事をちゃんと見ていった人はいません。お二人が、初めてです」

そう言っていて、彼はフッジーナ(薪)に火を入れた。炉の中が一千度になると、彼は無垢の丸い鉄の棒を突き刺すように入れてゆく。炉の熱で仕事場はたちまち熱し、ススで空気が次第に汚れてゆく。みるみる顔が黒くなる仕事場の中で、村の老人たちは新聞を読み始める。買物かごをさげたおばあさんが、わざわざ工房の中を横切っていく。

「いつもは、こんな汚い仕事場に入れ代わり立ち代わり入って来て、わたしを見ているんです。わたしがなにもできないと、みんな思っているんです。だから、いちいちかまってくるんです。ほっといてくれって言いたいぐらい、かまってくるんです。でも今日は、お二人を見るために来ているんです」鉄の熱し具合を見詰めながらそう言い、クツクツと笑う。あるとき、日本からフマガツリに特別注文のための国際電話が入った。先方は日本語で話せる廣瀬さんあてに電話を入れて来た。日本の電話交換嬢は慣れないたどたどしいイタリア語で廣瀬さん呼び続けた。それで社長のフマガツリさんは、てっきり彼女が廣瀬さんの恋人だと思ってしまう。おかげで、彼は、日本の電話の仕組みを社長に説明し理解させるのに、二時間もかかったとか。

四世紀にわたる鉄たたき工房

ポッチガ・デル・フェロバツツト・フマガツリはフマガツリ兄弟で経営していた。鉄たたき会社である。今は引退している兄フマガツリは馬のひづめの打ち替えの名人だった。弟フマガツリが第六代目の鉄たたき工房主として、現在、全工房を取りしきっている。彼のハガキ大ほどの大きな名刺にはこう書いてある。カバリエレ・ジエネジオ・フ



マガツリ。つまり、馬に乗った騎士フマガツリと。

「大げさですよ」と言っている廣瀬さんはけらけら笑う。その馬に乗った騎士フマガツリさんは、もう、ほとんど、目が見えない。彼の目には何百回となく鉄の破片が飛びこみ突き刺さったからだ。彼の瞳は鉄くずすすっかり傷付けられてしまっている。

ところで、鉄たたき工房の創設者ゼンデノーケノは元船乗りで、二五〇〇年の中世、ジェノバを経由してこの地にやって来た。ゼンデノーケノはこの地で馬車や剣や金庫そして馬のひづめ作りを開始したのだ。この地の教会が保存している資料によると、ゼンデノーケノはこの町で結婚し、鉄の工房を持った。とあるが、鉄たたき工房の歴史は途中であったとされる。が、やがて復活し、ゼンデノーケノ、ロモワル、スラキア、ジエネジオ、アメデーオーの名が工房主の名前として世襲

され、四百年の間、繰り返し繰り返し使われてきた。

創設者ゼンデノーケノは、いったいどこからやって来たのか、だれも知らない。が、名前から推察すると、スラブ人かもしれないということだ。馬のひづめ作りの職人たちの仕事は、やがて、鉄の窓飾り、ドア、ランプと広がってゆく。しかし、鉄と美を結合させて発展させたのはフランス、スペイン、ドイツの国々だった。鉄の美しさを生かして新領域を開拓することにイタリアは消極的だった。その消極性が、イタリアにおいて、鉄の芸術を二世紀遅らせたといわれる。

「現在、鉄のアーチストはイタリアには三人しかいない」とフマガツリさんは言う。それはローマの鉄板を丸くしたフォルムを基調にしているマルデーイナ、北部に住む、鉄のかたまりをミニメントにしているベネトン、もう一人が、最も伝統的に鉄を造形している

鉄のアーチスト マスコテリーを指す若い彼



鉄工房「フマガツリ」の中庭で昼休みのひととき

自分だ、ということだ。

ランチアのバンパーは鉄だった

彼をイタリアに赴かせるきっかけを作ったのは、高等学校二年生のとき、イタリアの車ランチア（槍という意味）が東京にやって来たことにある。

「小さな車ランチアは全部鉄でできていた。わたしはランチアのバンパーにびっくりしたんです。事故にあっても、それが破れない限り、どんなにクチャクチャになってもバンパーは金槌一本できれいに、もと通りになってしまってますね」

機械文明の代表である自動車に金槌一本でどうにでもなる部分が残されていた、そこに彼は驚いた。そしてゴチック建築の代表ミラノのドウオモを修理したことで、その名が知られているステンダグラス製造者グラッシイ氏の息子サンドロに連れられて、初めてフマガツリに行ったときの印象をこう語る。

「わたしは細かい仕事は昔から得意だった。指輪などの小さな細かい仕事が得意だった。ところが、こちらのやり方を見ていますと、鉄をバババーン、ポカーッとたたいて、それなのに出来上がってみると、いいものができている」

男っぽいダイナミックな仕事の中からデリケートな鉄の作品が作られてゆく魅力に彼はとりつかれた。そして毎日フマガツリに出かけ、鉄の音を聞いて過ごした。フマガツリに

通い始めて半月くらい経ったある日、彼は職人たちの目を盗んで、鉄にちよつとさわってみた。そして、なだた。その様子を見ていた社長は

「おまえ、ここにきてみるか」と初めて口をきいてくれた。こんなヘンな日本人が来た。ひとつ使ってみてやってくれ——やがて、彼はレーモ親方の下に置かれた。

※※※

職人たちの昼休み、私たちは廣瀬さんと工房の隣のレストランで食事をすませます。そこへ馬に乗った騎士フマガツリさんがやって来て「昼はなに食べた」と聞く。

「ひらめです」。彼は、そうか、という感じであなずき「今飲んでるものは何だ」

「カプチーノです」と答える。すると「それは食後の飲物ではない。食後はカフェだ。カプチーノは朝、朝食代わりに飲むんだ」

フマガツリさんは不満そうな顔をする。そこに廣瀬さんが「日本の方のコーヒーを飲む習慣とイタリアとは違うんです」

すると、フマガツリさんはうなずく。そして廣瀬さんに向かって「おまえは何飲んでる」「水です」

「水なんか飲んで。ジュースぐらい飲め」廣瀬さんは私たちに同情するように

「こんな社長相手ですから、お二人も疲れまして。こうやって彼はいつも入りこんで来て余計なことをしゃべってますよ。社長だし、邪慳に扱えないし。わたしをかまひすぎらんです」

フマガツリで鉄をたたき始めて三年があつたというまに過ぎた。最初は鉄の渦巻形もできなかったが、今ではレーモ親方の十分の四ぐらいは仕事ができるようになった、と彼は自分を採点する。

鉄のアーチスト・マズコテリをめぐって

ヨーロッパの墓場にはモニュメントという言葉が使われる。墓石にも彫刻をほどこし、



イタリアの建築にとって鉄の装飾は欠かせない 広

大な歴敷ピオマリアー二部の鉄の門も彼の作品だ

フマガツリの鉄の芸術はイタリア国内ばかりでなく、フランス、スイス、イギリス、オーストリア、ユーゴスラビア、カナダ、メキシコ、アフリカと世界中に広がっている。イギリスのエリザベス女王からは、夏の離宮入口の両サイドを飾る、フマガツリさんの肩書と同じ等身大の馬に乗った騎士の注文もあった。ローマのトレロッサ通りのマドンナ像、ローマ哲学研究所会館、ミラノのリナテおよびマルベンス空港の教会の十字架やミラノの大富豪ピオ・マリアーニ邸宅の装飾等々、すべてフマガツリの職人たちによって作られた作品だ。

巨大な鉄の芸術は一人ではできない。職人たちの技術とセンスの総合芸術なのだ。そして、いかなるものでも、黒のつや消しによるモノトーン作品だ。

「今世紀初め、マズコテリーという鉄のアーティストがいました。美しい花模様ペラランダとか。この人の作品がイタリアのいたるところに残っています。が、パリ万国博覧会のイタリア館にマズコテリーがにわたりの置物を作ったんです。それ、身ぶるいするほどいいんです。赤さびがもう出ていますけど、もうたまらなくいいんです」自分のめざす人はアルヌーボーのマズコテリーだ、といった感じで彼の言葉は響く。

鉄の芸術は、すべて、火と金槌と金床から生まれる。どんな細かな、やわらかな模様でも、槌一本で刻んでゆかなければならない。

「作品の図面はいちおうありますが、鉄はたたかされてゆくうちに歪んだり、ねじれたり、反ったりするんです。鉄は人間のいうことになかなか聞いてくれません」

「腰を入れて、鉄は熱いうちに打て、ですね。さめると言うことを聞きません」

フマガツリさんは彼の仕事ぶりを見て「ハハー、ブラボー（勇敢、偉いという意味）」と声をあげた。つまり、フマガツリさんは

「今のままでいったら彼は鉄のアーティストに絶対なれる」と言ったのである。

「ものすごく大げさ過ぎます」と彼は照れながら言う。が、それを望みますか？

彼は答えた。

「それは、わたし次第です」

今回は生物化学者 本岩丈二氏とスタッフ（在アカレスト）



ミラノ郊外に住む大富豪ピオマリアー二部で この家の鉄の作品も「フマガツリ」のものである

ISEEのコンパクター
固形ごみを原料の
1/4に圧縮処理
します



株式会社
日本アイ・エス・イー
本社 千104 東京都中央区八丁堀4-4-13 喜多ビル ☎03-553-3931(代)